

郷土の偉人・岩瀬和市さんの足跡

安祥中学校 3年 松嶋心那

1. 研究の動機

昨年は、ふるさと古井の偉人である岩瀬和市さんの業績について調べた。和市さんは古井産業組合の創立時から活躍されたことや後に碧海郡購買販売組合連合会(丸碧)の4代目の会長をつとめられ、更生病院の設立に尽力された人だと知った。地域の人たちも「小さいころ勉強がしたくてもできなかったけれど、その分、社会に出て頑張った人で、安城の農業の発展に尽くした人」などと話され、和市さんに尊敬の念を抱いていることを強く感じた。そこで、今年は地域に残っている和市さんの足跡について調べ、和市さんの業績について改めて調べてみたいと思った。

2. 研究の課題と方法

(1) 研究の課題

- ① 和市さんは古井産業組合でどのような仕事をされたのか。
- ② 和市さんは丸碧の会長時代にどのような仕事をされたのか。
- ③ 和市さんは産業組合の活動以外にどのようなことをされたのか。

(2) 研究の方法

- ・和市さんのことや産業組合について書かれている図書を読んで調べる。
- ・和市さんの足跡をたどって碑を見学し、碑文について図書などで調べる。

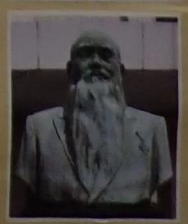
3. 岩瀬和市さんの足跡

(1) 岩瀬和市さんが活躍された時代はどういう時代なのか。

岩瀬和市さんが活躍したころ安城を中心とする碧海は日本デンマークとよばれ、先進的な農業を行っていた。当時は米作が中心で、他の商業作物はあまり栽培していなかった。ところが、碧海郡では、積極的にナシやスイカの栽培、養蚕・養鶏などの飼育を取り入れ、多角形経営を行っていた。日本デンマークとよばれた碧海郡の農業のもう一つの柱は共同化である。産業組合などを組織して、稲や肥料などを共同購入し、栽培した作物などを共同販売するというように一貫した共同化が進められた。その結果、昭和初期に全国で農村不況が起きても、碧海郡の農家はいち早く農村不況を乗り越えた。他の地域の人とは碧海郡の農業経営の仕方について知ろうと、1932・33年(昭和7・8)ころには、毎年1万人を超える視察者が訪れたという。そうした時代に、和市さんは地元の産業組合で活躍され、その後、碧海郡購買販売組合連合会(丸碧)の4代会長として、鶏卵の効率的な販売や、組合病院である更生病院の設立に尽力された。

(岩瀬和市さんの略年表)

- 1891(明治24) 古井村中本神で生まれる
- 1915(大正4) 古井産業組合設立、組合活動に従事(24歳)
- 1920(大正9) 古井産業組合長(29歳)
- 1928(昭和3) 碧海郡購買販売組合連合会(丸碧)の4代会長(37歳)
- 1935(昭和10) 安城更生病院設立(44歳)
- 1940(昭和15) 古井公会堂建設(49歳)
- 1963(昭和38) 安城市農業協同組合・組合長(72歳)
- 1965(昭和40) 安城市名誉市民(74歳) 1985年(昭和60) 永眠(94歳)



(2)古井産業組合でどのような仕事をされたのか。

1915年(大正4)、古井産業組合(信用・購買・販売)が設立された。和市さんは24歳であったが、父孫市さんの代理として活動を始めた。3年後の1918年(大正7)には、愛染堂境内に事務所が建設された。1920年(大正9)には、自ら組合長となって古井産業組合のリーダーとして活動した。和市さんが組合長になって2年後の1922年(大正11)には電化工場を設置して利用事業を開始した。電化工場には精穀機や豆粕粉碎機が備え付けられ、組合員は最新の設備を利用できるようになった。翌1923年(大正12)には動力籾すり機を、1925年(大正14)には肥料粉末機を備え付け、多くの農家が利用した。信用事業では、産業組合設立時から10年間で貯蓄額は3.3倍に、貸付金は12倍に達し事業は活発に行われた。また産業組合が中心となって、養豚・養鶏などの畜産やナシやスイカなどの栽培をいち早く取り入れた。こうして調和の取れた4つの事業(信用・購買・販売・利用)を展開した古井産業組合は、ほかの町村から多くの視察者が来るなど、模範的な組合として発展し、産業組合中央組合などからたびたび表彰を受けた。

1927年(昭和2)には、古井産業組合の事務所と農業倉庫を、愛染堂境内から現在のJA古井支所の場所に移転した。そして同年には農業倉庫を建設して、米の保管業務を始めた。1935年(昭和10)には古井産業組合創立20周年の記念式が挙行された。当初は古井の住民130人が組合員となったが、1936年(昭和11)には組合員数は183人となり、古井のほぼ全戸が加入する規模となった。

1938年(昭和13)には安城第二尋常小学校(現・南部小学校)の校舎を移転し、鶏卵荷造場・集積倉庫を設置した。1940年(昭和15)には、木造2階建てで、当時としてはかなり大規模な新事務所・公会堂を新設した。組合事務所の2階が古井の公会堂となっていた。この公会堂では様々な行事が開かれ、月1回は映画上演会や浪曲の会が催され、古井の住民の文化向上のために活用された。

当時の古井産業組合の建物の配置は、敷地西側の道路に向かって中央に新事務所・公会堂が建っており、その北側に安城第二尋常小学校の校舎を移転した倉庫、南側にも倉庫が建っていた。そして、新事務所・公会堂の東側には、米の集積倉庫があり、その南に古井区役所があった。なお、敷地西側の道路の北の交差点付近には、火の見やぐら・消防小屋・新聞縦覧所が設置され、そこから南に酒屋・材木屋・薬屋兼雑貨屋などの商店が多く立ち並び、活気のある通りであった。

1941年(昭和16)に太平洋戦争が始まると、産業組合の活動は村の行政とともに大政翼賛会の活動のもとにおかれた。生活必需品は配給制となり、産業組合の活動は下火となった。そして1944年(昭和19)の東南海地震、翌年の三河地震、8月の終戦と続き、組合活動は縮小していった。戦争後は農地改革が行われ、多くの小作農が自作農となった。農民の経済力の向上をめざして、1947年(昭和22)11月に農業協同組合法が公布されて産業組合は解消され、農業協同組合になった。



古井産業組合跡地



集積倉庫(上)・事務所・公会堂(下)



古井産業組合

1944年(昭和19)、杉浦茂一さんが代表となって、古井産業組合が和市さんの業績をたたえる「愛汗の碑」を古井産業組合の門の所に建立した。碑文は農林高校の元校長の山崎延吉先生によって記されている。(後に薬師堂前に移転)



「(略)始め郷土古井の産業組合が設置されると、経営優良と認められ、碧海郡産業組合連合会を主宰することとなった。日本農村の経済更生に範を示すに至り、愛知県同連合会に従事して、ついに全国連合会に参与するに至った。このことから、同君の手腕・声望の非凡であることを知る事ができる(略)」

1948年(昭和23)、古井農業協同組合が創設され、1953年(昭和28)には野外放送設備が開設された。組合員の家一軒一軒有線のスピーカーが設置され、古井農協事務室から放送ができるようになっていた。和市さんは62歳から72歳まで11年間、毎日定時に暁天放送をされている。

古井農業協同組合も、1963年(昭和38)に安城市農業協同組合へと事業を引き継いで解散式が行われ、地域に根差した組合の役割を終えた。なお和市さんは安城市農業協同組合の会長を3期つとめている。

(3) 丸碧の会長としてどのような仕事をされたのか。

碧海郡購買販売組合連合会(丸碧)は、1915年(大正4)3月に碧海郡内34の産業組合が連合して、安城町数馬(現御幸本町)に設立された。発足当初は米穀販売と肥料購売を行っていたが、成績は振るわなかった。丸碧にとって発展の契機になったのは、1923年(大正12)から養鶏組合連合会の鶏卵販売を引き継ぎ、同時に飼料購買を開始したことであった。そして1926年(大正15)の農業倉庫法改正によって、連合会が連合農業倉庫を経営できるようになったため、1927年(昭和2)に連合農業倉庫の経営を開始し、米の保管と販売を統一した。



丸碧建物(上)・丸碧跡地(下)

丸碧は購買事業(肥料・飼料・雑貨など)、販売事業(鶏卵・生鳥・大根・切干・レンゲ・種子)、農業倉庫業(米穀と小麦の保管・販売・運送)を経営の三本柱として碧海郡の産業組合の中心機関となっていた。丸碧の事業は販売額の増加が著しいが、その多くは、鶏卵販売と米穀販売であった。

丸碧では、1933年(昭和8)から翌年にかけて、3万5千円の過剰金が出て、出資金が10万円過剰となり、組合病院を設立することにした。この時、丸碧の第4代の会長(昭和5年12月～10年12月)をつとめ、組合病院の創立に尽力したのが岩瀬和市さんである。その後、和市さんは第6代会長(昭和13年9月～15年7月)に就任されたが、1940年(昭和15)6月に丸碧の解散が決定し、県連合会安城支部に組み入れられた。そして1945年(昭和20)に愛知県農業会が設立され、従来の農会と産業組合は統合された。

和市さんは、1940年(昭和15)の丸碧解散を記念して、農林学校の元校長の山崎延吉先生の碑文を表面に丸碧の状況を裏面に記した記念碑「共存同栄碑」を建立した。「共存同栄碑」と「歴代会長顕彰碑」は丸碧跡地に建っている。「共存同栄碑」の裏面には、和市さんによって丸碧の現況が記されている。



「名称:保証責任購買販売利用組合連合会 設立認可年月:大正4年11月
登録商標:略称丸碧連合会 解散認可年月:昭和15年11月15日
解散の理由:時局の進展に伴い、県下産業組合の統制を計るため、保証責任愛
知県販売購買利用組合連合会に事業の統合を為すによる(略)
事業種目・取扱物品:購買事業 肥料・飼料・雑貨・塩元売捌ほか、
購買事業:鶏卵・大根切干・紫雲英(ゲンゲ)種子・藁工品
利用事業:医療設備更生病院・診療科目略 連合農業:貨物の保管運送・米麦
菜種白米天竺豆(テンジクマメ)の販売 倉庫事業:収容力11万俵・所属農倉収容
力27万俵 所属組合数71(設立当初34) 組合員数19256」

古井産業組合の門の所に建立された「愛汗の碑」には、山崎延吉先生によって次のように記されている。

「(略)その間、碧海郡米穀販売に革新を遂げて進んで農業倉庫を経営するに至った。また碧海郡の鶏卵を共同販売に付して東京における不買同盟を屈服させた。丸碧の名を内外に宣揚するとともに更生施設として更生病院を建設する功績は永く町政に貢献すること比類なしといえる。これも君の剛直真摯なる性格と率先垂範の気魄によるところである」

安城市農協総合センターには、「れんげ頌徳碑」が建っている。かつては水田でれんげを栽培し、苗を植える前に肥料としてすき込む農法が盛んであった。れんげ種のなかでも愛知の山下改良種は全国に名声が高まり、各地で栽培された。

和市さんは、1966年(昭和41)に、山下改良種の育成に関わった人を称賛するために、「れんげ頌徳碑」を建立した(元は山崎頌徳館に併設)。碑には、碧海郡桜井町木戸出身で、肥料商安城支店の鳥居竹之助が大正3年に上海より志那種を移入し、三河れんげの育成に成功して広く各地に栽培されるに至ったこと、その後、店員の古井信太郎が主人の意志を継いで、犬山市羽黒の篤農家の長谷川一平に三河種の改良育成を委嘱したこと、尾張大晩生との交配によって山下改良が育成され、以来大いなる努力によって愛知のれんげ山下改良種として、その名声は全国的に高まり、食糧増産に寄与したことが記されている。

(4) 丸碧の会長として組合病院をどのように創設・運営したのか。

和市さんが第4代丸碧会長であった1933年(昭和8)に、丸碧の余剰金が3万5千円余り出て、出資金が10万円ほど過剰になった。和市さんは、このお金を生活必需品にあてるか、組合病院の経営にあてるか、どちらが望ましいか、師とする山崎延吉先生に相談した。山崎延吉先生は「農民生活で最も経済をおびやかすものは傷病であり、健康をはなれて幸福はなく、組合病院を設けて、組合院にすぐれた近代的医療サービスをすべきである」という意見であった。和市さんはその意見を受けて、日本デンマークにふさわしい組合病院の設立を行うことにした。

1935年(昭和10)11月、1500坪の敷地に本館2階建ての病院が、安城駅前町役場跡地に完成した。農村の自力更生を目的として造られたことから、山崎延吉先生により「更生病院」と命名された。更生病院は、内科・小児科・外科・産婦人科・耳鼻咽喉科・レントゲン科をもつ総合病院で、職員は院長以



愛汗の碑



頌徳碑



旧更生病院(上)・旧更生病院跡地(下)

下、医師7人、看護婦20人、事務員5人であった。治療費は、医療保険が未整備の時代に、丸碧からの補助で安くなっていた。また支払いも、組合の預金口座からの引き落としになっていた。

利用者は、最初の1年で入院、通院を合わせて、7万2523人にのぼったが、赤字経営であった。その赤字を丸碧の販売事業の利益で補てんした。その後、2台の巡回バスが碧海地内を1日1コース往復するようになって、利用圏もふえた。開院4年目には経営も軌道に乗り、地域医療に貢献した。

更生病院には更生神社がある。丸碧解散の記念碑「共存同栄碑」の山崎延吉先生の碑文には、「更生病院創設5周年を記念すると同時に、丸碧総合会27年の歴史を閉じるにあたり、(視察にみえた)各宮殿下よりの御下賜金を基金として事業を記念するために、更生神社の兼宮をなし」と記されている。

また1978年(昭和53)に、和市さんは「更生神社由来記」を記した。そこには、「昭和8年3月31日、丸碧は臨時総会を開き、創立20周年の記念事業として更生病院の創設を決議し建設を進め、昭和10年2月11日の紀元節をト(と)して竣工式を盛大に挙行し、続いて3月5日に開院式を執行し、翌3月6日産業組合記念日をト(と)して医療を開始し、連合会経営全国第一号の組合病院として発足し、待望の患者に絶賛の喜びを与えた」と、開院に至る過程を記している。

(5) 産業組合の活動以外にどのような取り組みをされたか。

① 大正天皇御即位悠紀斉田碧海郡御点定記念樹碑(古井神社)

1940年(昭和15) 和市さん50歳のときに大正天皇御即位悠紀斉田指定の記念碑を古井神社の本社殿西に建立した。碑の裏面には、後世の参考にするために当時の古井の現勢が刻まれている。

「人口 男 518人 女 525人 合計 1043人 職業別: 農業 167人
工業 4人 商業 4人 その他 8人 計 183人 有畜数: 牛 52
豚 127 成鶏 7000羽 農家作付: 反別 田 1857反歩
畑 185反歩 桑園 132反歩 果樹 31反歩(梨) 計 2205反歩
生産別物: 数量 米 11750俵 小麦 3270俵 大麦 590俵 繭 2150貫
鶏卵 9500貫 梨 22000貫 製縄 42500貫
団体: 保証責任古井信用販売購買組合 組合員 183人 大正4年」

1973年(昭和48)、和市さんは愛知県共済連合会退任と、訪米・訪加・訪韓を記念して、古井神社境内に「社記碑」を建立された。碑文中に当時の古井は237戸であったと記されている。なお、現在の古井は2,965戸である。

② 稲垣國三郎石像(憶念寺)

稲垣國三郎さんは、1886年(明治19)に古井本神で生まれ、櫻井高等小学校在学中に教員免許を取得し、14歳で碧海郡志賀須香尋常小学校(現在の岡崎市矢作南小学校)の教員となった。その後、1907年(明治40)に碧海郡安城高等小学校をはじめとする学校で訓導(教諭)として勤務された後、沖縄師範学校の校長の招きによって同校で勤務された。沖縄での5年間、各地に埋もれた話を掘り起こし、『琉球小話』(1934年刊校)に著した。またドイツ商船ロバルトソン号が宮古島



沖に遭難した際の逸話を紹介した「博愛」は文部省の小学校の教材として採用された。國三郎さんは沖縄教育界に大きな影響を与えた。

和市さんは青年会が農閑期に開く夜学校で学んだが、先生の中に稲垣國三郎さんがいた。和市さんは青年会活動に熱心に取り組み、古井青年会報の発行に奔走した。この会報に國三郎さんは度々執筆し、青年会活動を後押しした。1956年(昭和31年)、和市さんは郷土の先輩である國三郎さんの胸像を憶念寺境内に建立した。

また更生病院の本館の改修により、贈られた玄関の石柱を活用し、一本は愛染堂の堂標を造り、一本は憶念寺境内に無縁仏供養塔として観世音石像を併設した。

4 研究のまとめと感想

古井産業組合は現在のJAあいち中央古井支店の場所にあった。当時は事務所、公会堂、南部小学校の校舎を移転した倉庫、米の集積倉庫などがあり、道路をはさんで西側には商店が多く立ち並んで活気のある場所であった。組合長になった和市さんは、最新の農機具を設置し、組合員が利用できるようにした。また、産業組合が中心となって、養豚・養鶏などの畜産や、ナシやスイカなどの栽培をいち早く取り入れるなど、積極的に活動し、古井産業組合は模範的な組合としてたびたび表彰を受けた。1948年(昭和23)、古井農業協同組合が創立されてからは62歳から73歳まで11年間、毎朝定時に暁天放送をされた。

現在の御幸本町にあった丸碧は、今は記念碑「共存同栄碑」と「歴代会長顕彰碑」が建っただけである。当時は碧海郡の産業組合の中心機関として、25年余りにわたって肥料・飼料など購買事業、鶏卵などの販売事業、米の保管・販売などの農業倉庫業を経営してきた。第4代の会長となった和市さんは、丸碧の経営に積極的に取り組み、鶏卵の販売などで過剰となった出資金を活用し、組合病院(更生病院)を創設・運営した。

和市さんは「私は感謝の心を表すために所々に固定物を寄付した」と言っているように、組合の仕事以外に、石碑などを建立している。おもなものとして、古井神社に「大正天皇御即位悠紀斉田指定の記念碑」や「社記碑」、憶念寺に郷土の先輩で教育者である稲垣國三郎さんの銅像などである。

和市さんの足跡を訪ねて回って、古井産業組合跡地近くに「愛汗の碑」、丸碧跡地に「共存同栄碑」「歴代会長顕彰碑」、更生病院に「更生神社由来記」、古井神社に「天皇御即位悠紀斉田指定の記念碑」「社記碑」などがあることが分かった。それらの碑文や文書を見ることで、和市さんは郷土の古井や安城に大きな業績を残されたことを改めて確認した。戦後、和市さんは古井の住民の生活改善の活動に率先して取り組まれたが、そのことについてさらに調べるとともに、機会があれば和市さんの偉大さについて後世の人たちに伝えていきたいと思った。

(参考図書)

古井町史発行委員会『わがまち再発見 古井の歴史案内』

大見功氏「岩瀬和市」(塚本学遺稿『岡田菊次郎』)

安城の歴史を学ぶ会『安城の石造物』

安城市史編集委員会「第3章 日本デンマークの時代」『新編安城市史・通史編近代』

